

「つなぐ」「もどす」問い返しを生かして主体的・対話的に学び合う児童の育成  
～しおがま「学びの共同体」の視点に基づいた特別の教科道德の授業改善を通して～

塩竈市立第二小学校 教諭 大槻 征玄

### 1 主題設定の理由

現代社会において、学校教育では、児童が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

そのためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、「何ができるようになるか」「何をどのように学ぶか」を念頭に置き、授業を改善していく必要がある。

こうした状況を踏まえ、塩竈市では、「学びの共同体」を取り入れた授業改善を図っている。

「学びの共同体」を取り入れ、『できる・分かる』喜びを味わえる授業づくりを実施することで、一人一人が輝き活躍することができる考える。

しかし、私自身の日々の授業実践を振り返ると、国語科や算数科中心に様々な教科で学びの共同体の授業を実践していたが、学びの共同体を取り入れた特別の教科道德の実践につなげることができていなかったという反省があった。

そこで、「つなぐ」「もどす」問い返しの工夫を通して、主体的・対話的で深い学びのある道德授業を目指していきたいと考え、本主題を設定した。

### 2 研究の目標

「つなぐ」「もどす」問い返しの工夫を通して、主体的・対話的で深い学びのある道德授業を実現すること。

### 3 研究仮説

小学校第4学年を対象とした道德科学習指導において、次の手立てを講じることにより、主

体的・対話的で深い学びのある道德授業を実現できるであろう。

- (1) 「つなぐ」「もどす」問い返しの工夫
- (2) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた板書の構造化
- (3) 視点を明確にした振り返り表の提示

### 4 研究計画

#### 4. 1 研究対象

塩竈市立第二小学校 第4学年2組

#### 4. 2 研究計画

	実施時期	概要
1	4月	研究主題の設定
2	5月	実態調査①
3	5月～1月	研究実践
4	11月	実態調査②
5	1月	研究のまとめ

### 5. 研究の概要

#### 5. 1 児童の実態

第4学年2組は男18名、女21名、計39名である。男女仲が良く、素直で明るい。道德の授業に対して意欲的で、自分の考えを発表する児童が多い。

#### 5. 2 意識調査

##### 5. 2. 1 調査方法

令和元年5月に、「道德の学習について」及び「学び方について」の質問紙票の意識調査を実施した。

##### 5. 2. 2 意識調査（5月）

道德の学習については、道德の学習が「好き」「どちらかといえば好き」と回答

した児童は79%であり、苦手な児童が約2割いることが分かる(表1)。

学び方については、「友だちと一緒に考えるとき、自分からアイデアを出していますか。」という質問で「好き」「どちらかといえば好き」が82%であった。また、「となりの人やグループの人と話し合っただけで考えることは、一人で考えるときにも役に立っていますか。」という質問には、「好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童は、90%であった。自分からアイデアを出したり友達から聞いたりすることが、一人で考えるときにも役に立つと思っている児童が多いことが分かる。

以上の結果から、第4学年2組は道徳を苦手とする児童が少なからずいる一方、友達と考えを聴き合うことには好意的に捉えている児童が多いことが推測される。

表1 道徳と学び方に関する意識調査の結果(5月)

	【道徳に関する意識調査：質問項目】	5月
1	道徳の時間が好きですか。	79%
2	友だちと一緒に考えるとき、自分からアイデアを出していますか。	82%
3	となりの人やグループの人と話し合っただけで考えることは、一人で考えるときにも役に立っていますか。	90%

### 5.3 授業実践

#### (1) 「つなぐ」「もどす」問い返しの工夫

塩竈市の授業改善では、「つなぐ」「もどす」ことを取り入れることで学び合いを成立させることができるとしている。道徳の学習においても、児童が学び合うためには、教師の「つなぐ」「もどす」問い返しが有効であると考えた。

そこで、「つなぐ」「もどす」問い返しを以下の構成にまとめ、実践した(図1)。

「つなぐ」「もどす」問い返しの構成を基に、児童の「分らなさ」をつないだりもどしたりすることで、学級全体で深い学び合いにつなげることができた。

しかし、教師側が「つなぐ」「もどす」意識を持ちすぎ、授業前段に予定以上の時間

を要してしまい、展開後段や振り返りの時間確保が十分にできないという課題も残った。

#### 学び合いを成立させるための「つなぐ」「もどす」問い返し

##### I 分らなさ・疑問を「つなぐ」

○「なんだろう」や「分からない」と発言する児童を見つける意識を持って学級の様子を見る。

→「なんだろう」や「分からない」と発言した児童を見つけ、「○さんはどういうところで悩んでいる？(困っている?)」と問い返し、その児童から発言を引き出し他者につなぐ。場合に応じて、他者につないだ考えをペアやグループ、全体にもどすこともある。

※困った表情や首をかしげる等の児童を見つける意識を持って学級の様子を見る場合もある。

##### II 本時の道徳的価値に関する発言を「もどす」

①本時の道徳的価値に関する児童の発言があった際、その発言の意味や意義、背景を児童にもどすことで深く考えさせる。

→「○○さんの△△という発言って、どういうことかな？(どういうことを言おうとしているのかな?)」と、本時の道徳的価値に関する児童の発言を他者にもどす。

②複数の児童の発言を比較して「もどす」ことで深く考えさせる。

→「○○さんの△△という考えと□□さんの▲▲という2つの考えを聞いて、あなたはどのように考えますか？(△△と▲▲だったら、どちらの考えの方が納得(共感)できそう?)」と、ねらいとする道徳的価値と人間理解の価値(分かっているけどできない人間の弱さ)を比較して児童にもどす。

図1 「つなぐ」「もどす」問い返しの構成

#### (2) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた板書の構造化

板書の構造化は、「できるだけ多くの児童が見て分かりやすく、考えやすい」というユニバーサルデザインの理念を重視した。板書の中央上段に「本時のめあて」、中段に「教材を問う発問」、下段に「教材の要点(挿絵と図式化)」及び「児童の考え」、板書左右に「テーマ発問」とした(図2)。

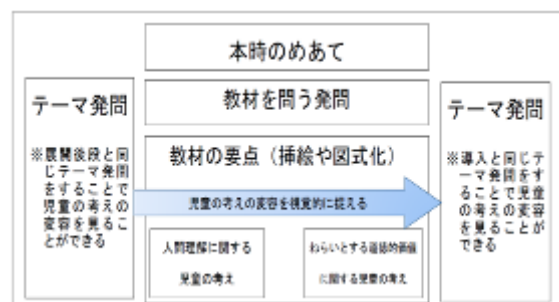


図2 板書の構造化

### (3) 視点を明確にした振り返り

児童が学びの省察（リフレクション）を通して、学びの質を高めることができるように視点を明確にした振り返りを実施した。

新学習指導要領特別の教科道徳編第2章第2節2の「道徳性を養うために行う道徳科における学習」を基に、児童が「道徳的諸価値について理解する」「自己を見つめる」「物事を多面的・多角的に考える」「自己の生き方についての考えを深める」の4つの視点について振り返ることができるようにした（図3）。具体的に、「道徳的諸価値について理解する」は「1. 分かったこと」、「自己を見つめる」は「3. 自分の考えの変化」及び「4. 自分の経験と結びつける」、「物事を多面的・多角的に考える」は「2. よかった友達の考え」、「自己の生き方についての考えを深める」は「5. これからの生活に生かしたいこと」と児童の言葉に置き換え、視点を明確にした振り返りができるように構成した。

振り返りの視点を明確にすることで、考えることが得意でない児童にとって非常に参考になった様子が見受けられた。

しかし、考えることが得意な児童にとっては、自分の深まった考えを視点に沿って書く意識が強くなってしまい、少し書きにくそうな様子も見られた。

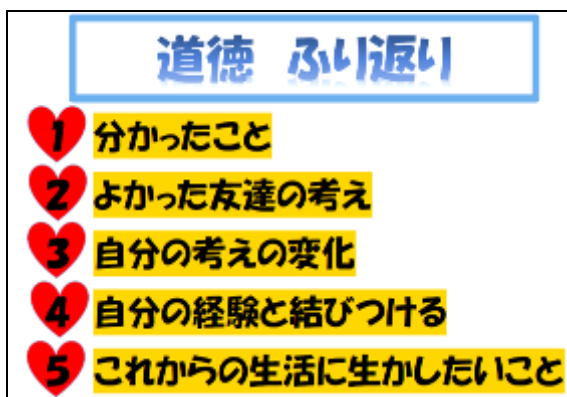


図3 視点を明確にした振り返り表

## 6 研究の成果と今後の課題

### 6. 1 研究の成果

#### (1) 「つなぐ」「もどす」問い返しの工夫

分からなさ・疑問を「つなぐ」では、「なんだらう」や「分からない」と発言する児童の発言を基に授業を展開していったため、悩んでいた児童も学び合いに参加することができた。

本時の道徳的価値に関する発言を「もどす」ことで、児童が45分間思考し続けられるように授業を展開できた。授業の導入段階と展開後段で児童の考えが変容し、考えが深まっていった様子も見られた。

道徳と学び方に関する意識調査の結果では、どの項目も割合が増加した（表3）。「つなぐ」「もどす」問い返しを工夫することで、児童が主体的・対話的に学ぶことができるようになりつつあった。

表3 道徳と学び方に関する意識調査の結果（5月と11月）

	【道徳に関する意識調査：質問項目】	5月	11月
1	道徳の時間が好きですか。	79%	89%
2	友だちと一緒に考えるとき、自分からアイデアを出していますか。	82%	89%
3	となりの人やグループの人と話し合っ て考えることは、一人で考えるときにも 役に立っていますか。	90%	92%

#### (2) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた板書の構造化

構造的な板書にすることで、児童は異なる立場や状況に立つ登場人物の考えを比較・検討しやすくなった（図4）。

また、本時のめあてや挿絵等を活用して板書を構造化することで、児童が教材の流れを確認し、考える論点をより明確に捉えられるようになった（図5）。

板書を対比させることで、授業の導入と展開後段の児童の考えがどのように変容したかを視覚的に捉えられるようになるとともに、道徳的価値を基にした多様な考えに気付く児童が多く見られた（図6）。



図4 比較・検討しやすく工夫した構造的な板書



図5 考える論点を明確にした構造的な板書



図6 板書を基に自分の考えをまとめる児童の様子

### (3) 視点を明確にした振り返り表の提示

視点を明確にした振り返りを取り入れることで、多くの児童が視点を意識し、本時のめあてに焦点化した振り返りを書くことができるようになった(図7)。

また、視点を明確にした振り返りを取り入れることで、振り返りを書くことが得意でない児童も、本時の振り返りを書けるようになり、支援の一つとして有効であった(図8)。

更に、学習の振り返りの記述内容を分類したところ、「考えの変容が見られる記述」が11名、「友達の影響による気づきがある記述」が9名であった。視点を明確にした振り返り表を取り入れることによって、学級の半数以上の児童が新たな道徳的価値を得ることができた(図9)。

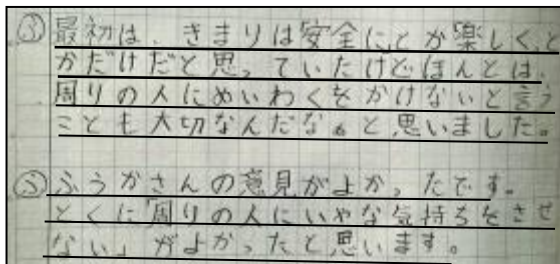


図7 児童の道徳ノートによる振り返り

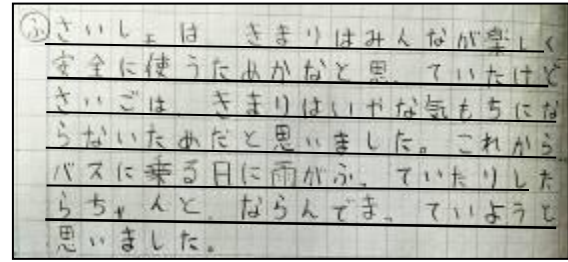


図8 児童の道徳ノートによる振り返り

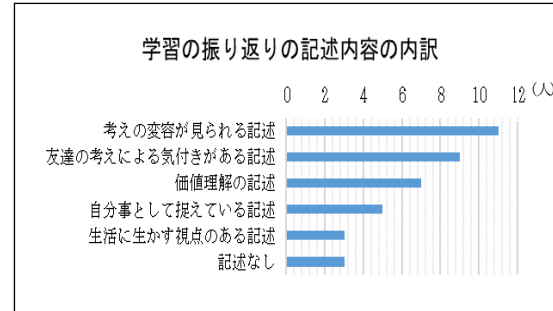


図9 学習の振り返りの記述内容の内訳

## 6. 2 今後の課題

### (1) 「つなぐ」「もどす」問い返しの工夫

児童の「分からなさ」や「難しさ」をつないだりもどしたりする問い返しを通して、深い学び合いができた反面、授業の展開前段に時間を要したため、展開後段や振り返りの時間確保等をタイムマネジメントしていく必要があった。

### (2) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた板書の構造化

児童の発言を基に、「何を」「どこまで」板書するのかを明確にできず、板書の文字数が多くなってしまったため、児童が理解しやすいような文字数の少ない板書にしていく必要があった。

### (3) 視点を明確にした振り返り表の提示

視点に沿って内省(リフレクション)ができた一方、考えを深めた児童にとっては、視点に固執してしまうことにより、本来書きたいことを書けない様子も見受けられた。そのため、視点に沿って書くことを基本としながらも、書きにくさを感じた場合には視点に捉えられずに自分の考えを記述してよいことを伝える必要があった。

## 7 まとめ

今年度、しおがま「学びの共同体」の視点に基づいた特別の教科道徳の授業改善に取り組んできたことで、児童の意欲が着実に高まってくことを実感することができた。

また、児童の「分からなさ」をつなぐことで、学級全体が友達の考えを理解しようと真剣に聴く姿も見られるようになってきた。さらに、「〇〇さんの言いたいことって、こういうこと？」と児童が問い返す様子も見ることができた。

一人一人が輝き活躍できるようにするため、他の教科でも実践を重ねながら『できる・分かる』喜びを味わえる授業づくり」に今後も取り組んでいきたい。

### <主な参考文献>

- [1] 佐藤学：「教師たちの挑戦～授業を創る学びが変わる～」小学館 2003
- [2] 佐藤学：「学校を改革する～学びの共同体の構想と実践～」岩波ブックレット 2012
- [3] 文部科学省：「小学校学習指導要領特別の教科道徳編（平成29年7月）」2017
- [4] 加藤直行：「道徳授業を変える教師の発問力」東洋館出版社 2015
- [5] 加藤直行：「深く考える道徳授業」光文書院 2015
- [6] 加藤直行：「考え、議論する道徳に変える指導の鉄則50」明治図書出版 2017